

[資料紹介] マルクスレーニン主義研究所刊『マルクスとエンゲルスの蔵書』

著者	杉原 四郎
雑誌名	関西大学経済論集
巻	18
号	1
ページ	117-124
発行年	1968-04-20
その他のタイトル	[Material] EX LIBRIS Karl Marx und Friedrich Engels Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek
URL	http://hdl.handle.net/10112/15220

資料紹介

マルクス-レーニン主義研究所刊

『マルクスとエンゲルスの蔵書』

EX LIBRIS Karl Marx und Friedrich Engels, Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek. Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der SED. Dietz Verlag Berlin 1967, 228S.

杉原四郎

I

本書は、かつてマルクスとエンゲルスの蔵書であったと確認されるもので現存する書物を、著者名（特殊の場合は書名）⁽¹⁾のアルファベット順に配列し、それぞれに解説を附したものである。総数504点（約700冊）で、その大部分はベルリンのマルクス-レーニン主義研究所に保管されているものだが、他所に所蔵されている若干のものもふくまれている。たとえばアムステルダム国際社会史研究所のもの（カタログナンバー 137, 298, 301, 302, 457——以下こうした数字は本書のカタログナンバーをしめす——）、ミラノのフェルトリネリ研究所のもの（22, 41, 380）などがそうで、東北大学の所蔵する *Misère de la philosophie* 初版のマルクスの手沢本も入っている（304）。英語（約180点）、ドイツ語（約170点）、フランス語（約130点）の書物が大部分で、イタリア語、オランダ語、デンマーク語（359）、ラテン語（451）などの書物が極く少数ある⁽²⁾。約80冊のロシア語の書物のカタログは、別に近くソ連のマルクス-レーニン主義研究所で作製されることになっているので、本書では除外されている。

この貴重な蔵書が第二次大戦後ドイツで再発見されたことをブルノ・カイザーが報じたのは1953年だった⁽³⁾が、雑誌『ドイツ労働運動史研究』の創刊号にのったインゲ・メラールの報告は、この蔵書に関する調査研究が1957年から開始されたことをのべていた⁽⁴⁾。それ以来10年がたち、カイザーの編集によって漸くその成果が一本にまとめられたわけである。本書はまず「マルクスとエンゲルスの蔵書の運命」と題する序文（S. 5—20）をカイ

ザーが書き、インゲ・ヴェルハン (Inge Werchan) の手になる蔵書カタログ (S.21—208) がおさめられ、最後にローランド・ダニエルズ (Roland Daniels) ——マルクスは1849年ケルンで当局から追放命令をうけたとき、その蔵書をケルンの共産主義者同盟の指導者の一人であった医師のダニエルズに寄託して、あわただしく渡英したのだった⁽⁵⁾——が1850年に書いておいた「カール・マルクスの蔵書の現存明細書」(S. 209—228) がついている。

マルクスの蔵書だけでもその晩年には2,000冊をはるかに超えていたであろうと思われる⁽⁶⁾のに、今では二人の蔵書をあわせても約700冊しか知ることができないということは、本書の資料的意義の限界を端的に示すけれども、たしかな証拠で二人の蔵書であったことがあきらかであるものだけに厳選し、そのすべてに解説をつけてその根拠を示すとともに、所蔵者の書き込みの状態なども説明するのみならず、全ページの2割におよぶ写真版でその書き込みの状態を具体的に紹介している本書の意義は大きい。1967年は、『資本論』刊行100年記念ということで、わが国でも外国でも、マルクスにちなむ出版活動がさかんであったが、どちらかといえば地味な体裁と内容をそなえた本書は、この年に刊行された多くの文献の中で、実質的には最も注目すべきものの一つではなからうか。1958年3月にベルリンのマルクス-レーニン研究所をたづねたとき、この蔵書の一部を見る機会をもった私にとって、本書の出現はとくに印象深いものがあるのである。

- (1) 匿名のもの、年報のたぐいおよび雑誌はタイトルによって適宜くみ入れられている。たとえば386—391は種々の Report, 392—396は雑誌 (Review) 類であって、Rの中に配列されている。雑誌論文の抜刷——著者からマルクスやエンゲルスに寄贈されたものが多い——がかなり目につくが、雑誌そのものの所蔵はわずかである。また同一人の著作で最も点類の多いのはオーウェン (342—351の10点) である。
- (2) イタリア語の書物で目につくのは、バクーニン (22), フェルリ (148—150), ロリア (275—279), マキアベリ (286) などである。オランダ語ではニーヴェンフィスの『カール・マルクス』(1881年、著者からのマルクスへの贈呈本, 334) がある。このうちロリヤとレーヴェンフィスの書物については後述する。
- (3) Kaiser, Bruno : Aus der Bibliothek von Karl Marx. Ein Bericht über wiedergefundene Schätze. *Neues Deutschland*, Nr. 104(B), 5. Mai. 1953. ただし私はこの文献は未見である。
- (4) Möller, Inge : Bemerkungen zu einigen Büchern aus der Handbibliothek von Marx und Engels. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. 1 Jg. Berlin, 1959, Heft 1. S. 151.
- (5) Vgl. *EX LIBRIS Karl Marx und Friedrich Engels*, S. 9.

- (6) *Ibid.*, S. 9. ちなみに『資本論』執筆当時のマルクスの自宅での読書生活については、ラファルグの見聞記に詳しい（「カール・マルクス、個人的な思い出」、1890—91。土屋保男編訳『マルクス回想』、国民文庫、1960年に所収）。ただし彼がその中で「マルクスは書物に書き込みをすることはなかった」（前掲邦訳103ページ）とのべているのは誤りで、事実は本書できらかなように、マルクスもエンゲルスもしばしば書物の余白に批判的注釈を書きこんでいると、カイザーはのべている。*EXLIBRIS*, S. 8. この点蔵書にそうした痕跡を残さなかったアダム・スミスの場合と対照的である。

II

1849年5月にケルンを、同7月にはパリを追放されたマルクスは、8月にはロンドンに亡命するのだが、ケルンのダニエルスにあづけていった彼の蔵書はその後どうなったのであろうか。カイザーの序文にしたがって経過のあらましをたどって見よう。ダニエルスはケルンの共産主義者事件の裁判で結局無罪になるが、拘禁生活のために36才の若さで1855年に早世したので、蔵書返還の交渉はマルクスとダニエルス夫人との間ですめられ、マルクスの友人カール・シーベルの助力で、1860年末に漸くロンドンに到着した。だが実際にマルクスの手にもどった書物は、1850年にダニエルスが書いた明細書とくらべると、かなりの脱漏があった。⁽¹⁾かえらなかつたものの中には、フーリエ、ゲーテ、ヘルダー、ポルテールの著作全部や多くのギリシャ古典、ヘーゲルの『精神現象学』と『論理学』、それにデールの編纂した『18世紀の財政・経済学者』⁽²⁾などがあり、これらの書物に対する愛惜の念を、マルクスは1861年2月27日づけの手紙でエンゲルスに訴えている⁽³⁾。

34年間のロンドン生活で増加してかなりの分量に達したマルクスの蔵書を、1883年に彼の遺言執行人となった末娘のエレノアとエンゲルスとが処理する⁽⁴⁾のだが、エンゲルスは1884年2月5日、エレノアの姉でラファルグと結婚してパリにいるラウラに手紙を出し、マルクスの全蔵書を一括して引継ぐことは置き場所がないのでできないとのべ、ラファルグ夫妻が必要と思われるもの——たとえばマブリの全集、ギゾーの『フランス文明史』、やフランス革命史の文献、スミスやマルサスの著書の仏訳本など——はパリに送ってもよいとつけている⁽⁵⁾。こうしてフランス語の若干の書物はマルクスの蔵書から離脱する⁽⁶⁾し、その他ロシア語の書物はラヴロフへ⁽⁷⁾、複本のあるものはその頃テューリッヒで開設されたばかりのドイツ社会民主党文庫⁽⁸⁾へ、ブルーブックのたぐいは『資本論』の英訳に従事していたサムエル・ムアヘという風に、かなりの部分がこの時期に整理され、残りの書物はエンゲルスのもとで彼自身の蔵書とともに保管されることになった。

エンゲルスはその晩年に、ベーベルその他のドイツの社会民主党の代表者たちの希望に

そして、マルクスと彼の蔵書の全部を一括党に遺贈するつもりであることを洩らしていたが、1895年10月20日（つまりエンゲルスの死後75日目）の党中央機関紙『フォルヴェルツ』は、27の荷箱につめられたマルクスとエンゲルスの蔵書が党に送られてきたことを報告した。こうして二人の蔵書はベルリン（1914年以降は Lindenstraße 3 の『フォルヴェルツ』館）に保管されることになるが、27箱の中味の明細書は保存されておらず、その後の管理もきわめて不十分で⁽⁹⁾、そのために蔵書の一部が文庫の外へ持ち出されたままになったり、製本の際に貴重な書き込みの部分が裁断されたりする被害が生じた。ただその間に、1923年以来ソ連の科学者がベルリンに来て党文庫のすべての書籍の調査をし、その結果部内用資料として「マルクスとエンゲルスの蔵書から来た書物の目録」⁽¹⁰⁾を作成するという貴重な作業ががおこなわれた。

ナチスによる1933年の社会民主党禁止の後党文庫も差押えられ、その書物はダーレムの国家文庫 (der Preußische Geheime Staatsarchiv) に移管されたが、さらに若干の図書館や研究所がそれぞれの蔵書の補充のためにそこから書物を取り出した。ナチス体制の崩壊後ダーレムに戦火をまぬがれてのこっていた書物はドイツ社会主義統一党の手に帰し、党中央委員会所属のマルクス-レーニン主義研究所に委託されることになった。これによって、また一旦散逸した書物の他の場所での発見と蒐集によって、本書に結実するマルクス・エンゲルス蔵書目録づくりの基礎がかためられたわけである。

- (1) 『マルクス年譜』(M.E.L. 研究所編, 1934, 岡崎・渡辺訳, 1960) によれば、マルクスは、1850年10月に、ダニエルスに蔵書の一部を売却するように依頼しており、また1851年4月に、ダニエルスを介してケルンの友人達から50ポンドを受取っている(邦訳 p.123, 133)。こうした事実が脱漏の生じたことと関係があるのかどうか、カイザーはこの点には全然ふれていない。
- (2) デール編のこの著作集にはボアギュベールやローの諸著作がおさめられており、パリ時代のマルクスの経済学の研究過程で活用された。マルクス『経済学ノート』(杉原・重田共訳, 1962)を参照。なお本書の蔵書目録にあるヘーゲルの著作は、182の哲学史講義だけである。
- (3) Marx-Engels, *Werke*, Bd, 30, 1964, S. 160.
- (4) その後エンゲルスとエレノアとの間がつめたくなり、それがマルクスとエンゲルスの遺産の継承と管理にも影響する事情については、つぎの書物に詳しい。Tsuzuki, C., *The Life of Elenor Marx, 1855—1898*, 1967, pp. 241—247.
- (5) Engels, F. P. et L. Lafargue, *Correspondance*, Tome 1, 1956, pp. 166—169. *Werke*, Bd. 36, S. 101—102.
- (6) こうして一旦ラファエルグの手にわたった書物のうちで、グリムとディドロの往復書

簡集はふたたびマルクスの蔵書に復帰し、本書のカタログナンバー170に掲載されているが、他のものは散逸したままのようである。

- (7) エンゲルスはラブロフあてへの1884年1月28日づけの手紙で、マルクスが抜粋をつくっているものや『資本論』第2巻の編集にエンゲルスが必要とするものをのぞいたおよそ100冊ばかりのロシア語の書物を送ってもよいとのべている。Werke, Bd. 36, S. 94. なお S. 118 をも参照。
- (8) この文庫の開設の事情やその後の模様については、ドラーンの解説（1920）の大意を紹介したつぎの短文を参照。「ドイツ社会民主党文庫」、『マルクス・エンゲルス選集月報』第22号、1952.
- (9) 党文庫の書物には SPD の蔵書印がおされ、その上に特定の書物には Marx-Engels-Nachlaß という印がおされていて、書物の素生が一応わかるようになってはいたが、その選定の仕方は厳密なものではなかったらしい。
- (10) このソ連の学者の作業記録は本書でも活用されている。たとえば 127 や 352 の解説 (pp. 59—60, 157) を参照。

III

マルクスとエンゲルスの蔵書のカイザーによる内容別点数は大約つぎの通りである。一般史と労働運動200, 経済学および経済史145, 哲学60, 技術と自然科学30, 農業20, 多くの統計書と1ダースの軍事学その他⁽¹⁾。また総数504点のうち、エンゲルスの蔵書と確認もしくは推定されるもの約115点で、それ以外のものから二人のうちのどちらに帰属させるべきが不明のもの若干をのぞいたのこりがマルクスの蔵書である。またこれを彼らが入手した時期からなげめると、エンゲルスの蔵書の中には、たとえば72のギリシャ語文法書のように、若き日につかった教科書もあるが、全体の三分の二以上が1870年代以降に公開された（したがってそれ以後に彼が入手した）書物であって、これらの中には著者からエンゲルスに贈呈されたものがかなりふくまれている。

晩年に入手した書物の比重が高いという傾向は、マルクスの蔵書についても見られるのであって、マルクスがまだ英語に習熟していない1840年代からつかっていたマカロックやステュアートのフランス語訳（282, 444）などもあるにはあるが、『資本論』の執筆にとりかかってから以後に入手したものが多く、その第I巻公開後とくに他人からの贈呈本がふえている。二人自身の著作も若干ずつふくまれているが、この場合も彼等の晩年の出版物がその大半をしめている⁽²⁾。

このように本書におさめられた蔵書目録は、後期マルクスと後期エンゲルスの問題意識と思想動向をうかがう一資料としても活用することができるであろう。そのための資料と

してはこの他に、当時の彼等の公刊著作、草稿および読書ノート、往復書簡および第三者との交通などがあるが、本書の内容をこれらの他の資料と関連させながら吟味してゆくと、興味ぶかい問題にすくなく遭遇する。たとえば、エンゲルスがゾルゲあての1883年4月24日づけで言及している⁽³⁾ところの、ヘンリー・ジョージの『アイルランド土地問題』(*The Irish land question*, 1881)の中へのマルクスの書き込みが、本書(159)で当該箇所の写真版つきで紹介されているが、これおよび160の『進歩と貧困』(*Progress and poverty*, 1880)につけられた解説を、ゾルゲあてのマルクスの1881年6月20日づけの手紙の中のジョージ論⁽⁴⁾と共に読めば、19世紀末の英米思想界にまきおこったジョージ旋風をマルクスがどのようにうけとめたかを、ヨリ適確におさえることができるであろう⁽⁵⁾。

あるいはまた、『資本論』第Ⅲ巻(1894)の序文でエンゲルスは、マルクスの死後彼について書かれた諸著作の中からアキレ・ロリアの著作を三種あげ、それらを論評している⁽⁶⁾が、この三著作はすべて本書のカタログにあり(274, 276, 278)、それぞれの中へのエンゲルスの書き込みが紹介されている。ロリアの書物の他にも、25, Barth, P., *Die Geschichtsphilosophie Hegel's und der Hegelianere bis anf Marx und Hartmann*, 1890; 210, Jäger, E., *Der moderne Sozialismus, Karl Marx, d. Internat. Arbeiter-Association, Lassalle u.d. deutschen Sozialisten*, 1873; 334, Nieuwenhuis, F. D., *Karl Marx. Kapitaal en arbeid*, 1881など、マルクスをとりあげた諸著作が、マルクスやエンゲルスの感想をしるした書き込みをともなって存在する⁽⁷⁾が、こうした点の検討は、マルクス主義のよびおこした諸反響に対して彼等がまたどのように対応したかということをうかがうに役立つであろう。

- (1) 二人の蔵書中の文学作品としては、スウィフトの著作集(449)とミンナ・カウツキーの小説(223)だけで、マルクスの蔵書に当然ふくまれていたはずのゲーテ、バルザック、シェクスピア、ダンテの著作、エンゲルスの持っていたであろうシェリーの作品が散逸してしまったのが惜まれる。カイザーは、その理由として、エンゲルスがマルクスの娘たちに蔵書中の文学作品の多くをわけたこと、SPDの文庫でこの種の書物はほとんどかえり見られなかったことをあげている。
- (2) これらの中で最も注目されるのは302の『資本論』第Ⅰ巻初版で、マルクスによる第二版のための自筆補正本である。これはアムステルダム社会史国際研究所にあるので、本書では書き込みに関する具体的な説明はない。この点については、戸原四郎「マルクス遺稿とアムステルダム社会史国際研究所」、『社会科学研究』第8巻、第5・6号、1957を参照。
- (3) *Werke*, 36, S. 17, 45.

- (4) *Werke*, 35, S. 199—201. 岡崎次郎訳『資本論に関する手紙』, 国民文庫版下巻, pp. 301—304.
- (5) なおマルクスには別に, ジョージの *The Kearney Agitation in California* (*Pop. Science Monthly*, Aug. 1880) という論文からの抜萃ノートがある。川鍋正敏「国際社会史研究所蔵マルクス・エンゲルスの草稿および読書ノート目録」『立教経済学研究』XX, 3 (1966), p. 72.
- (6) *Werke*, 25, S.25—28, vgl., S. 898—905, 909. なおロシアとマルクス・エンゲルスとの往復書簡はつぎの書物におさめられている。Marx e Engels. *Corrispondenza con italiani* 1828—1895, Feltrinelli, 1964.
- (7) Karl Marx, *Kapitaal en Arbeid*. へのマルクスの書き込みは, 前掲の雑誌にメラーによってくわしく紹介されている。 *Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. I. 1. 1959, S. 158—168, なお, ニーヴェニフィスにあてたマルクスの二通の手紙を参照。 *Werke*, 34, S. 447, *ibid*, 35, S. 159—161.

IV

はじめにものべたように, 本書のカタログが収録することができた504という点数は, マルクス・エンゲルスの蔵書として本来あったであろうと予想される書物の数とくらべてあまりにもすくない。このことは今後時とともに, 新発見による点数の増加がみられる可能性が大きいことを意味するでもあろう。カタログの最後の504番目にあげられているのはペティの著作であって, これは本書の印刷中にベルリンで発見されたのを追加したもの——序文の叙述では503点という数字のままになっている(S.9)——であるが, この事実一つを見てもそうした可能性のこっていることを十分に予想させる。だがヨーロッパが今世紀すでに二度も大戦を経験し, その間にナチスの焚書がおこなわれたことなどを考えると, この可能性をそれほど大きくみつめることは危険かもしれない。しかしもし世界の平和が維持され, 体制や民族や思想の差をのりこえた各国間の文化交流がますます活発におこなわれてゆけば, 両巨人の蔵書の全貌をより正確につかむことができるようになるであろう。

アダム・スミスの蔵書についてのボナーのカタログが1894年に出てから後, 新資料にもとづいて1932年にその増補第2版がつくられ, さらにそれに対する補遺が, その後の研究と調査の一成果として, 水田洋教授の手で昨1967年に出されたことにより, われわれのスミス像そのものも大いに精密度を加えた⁽¹⁾のだが, マルクス・エンゲルスの蔵書についてもまた, 本書の編者の努力でまとめられた貴重な土台をふまえながら, このカタログを

さらに補訂し充実してゆくという今後の作業が、多くの人々の協力によってすすめられ、あまり程遠からぬ将来にその成果を見る日がくることを、期待したいものである。

- (1) 水田目録の意義ならびにスミスの蔵書目録がスミス研究に対してもつ一般的効用については、小林教授のつぎの一文がといてくわしい。小林昇「HIROSHI MIZUTA: ADAM SMITH'S LIBRARY—紹介と感想—」、『立教経済学研究』XXI, 4 (1968)。教授もいわれるように、「蔵書目録というものの内容と効用とは、蔵書の主によってさまざまであり、それらを一概には取り扱えない」(p. 177)が、この問題を、スミスの場合について、カント、マルクス、メンガーなどの場合と比較しつつ論じられたこの一文は、同じ問題を「貧困と戦いながらおもにブリティッシュ・ミュージアムその他の図書館の本を利用したマルクスの場合」(同上)について考える場合にも、示唆するところがすくなくない。